



# 随想 スケソ 談義

福原 暁

阿寒連峯が遠く銀白色に輝き、道東の万物が厳しい冬と対決する季節になると、釧路の岩壁はスケソを腹一杯にした大型トロール船所謂北転船で賑合い、荷揚げのクレインの音と共に港は俄に活気づいてくる。

スケソは従来まですく安魚の代表名で、その製品も凍寒品や、スキ身が主であつたが、近年冷凍スリ身が開発されてからは練り製品として急に脚光を浴び、最近では年間一五〇万トン前後も漁獲され、しかも魚価も維持されて吾が国最大の漁業にのし上つた。これは北転船によるカムチャツカ東西、並びに北千島海域漁場の開発が大いに寄与したと言える。

この魚の呼び名は沢山あつて、北海道ではスケソ、新潟や富山県ではヨイダラ、キジダラ等と呼んでいるが、これ等は総てあだ名（地方名）で、隣りの韓国ではミンタイと言つており、英名はボラツク、日本での最も正しい名前はスケトウダラでこれは吾が国の学名になつてゐる。

この魚は、正確に言えばタラ科のスケトウ

ダラ属で、同じタラ科のコマイとマダラはスケトウダラの親戚に當つてゐる。

スケソは太平洋北部一帯に広く棲息しており、韓国では東岸ぞいに半島の南端まで、裏日本では山口県、また表日本の沿岸では宮城県まで分布してゐる。その北限は明確でないが、ベーリング海の奥部にあるアナデル湾や、ベーリング海峡のチュコッキ岬と、ロレンツ島までは分布が認められてゐる。これ等の分布状態からみてスケソは冷水性の魚で、棲息に適した水温は摂氏の二〜六度とされてゐる。

スケソはサケ、マスや、ニシンと共に昔から北海道で非常になじまれており、その腹の子は周知のように紅葉子と称して有名だが、親の方はガラと言つて二足三文。前述の如く安い魚の代表のようなものであつたが、近年は親の方も次第に有名になり、スケソは親子共々魚の中の魚になりつつあつて、今やスケソを除いて日本の漁業は論ずることが出来な

北海道近海のスケソは一般に一月から四月頃にかけて産卵を行うが、カムチャツカ方面ではこれが遅れ、四月から五月にかけてと推測されている。この魚は生れて四〜五年経つと体長も四〇センチ前後となつて親になる。その雌一尾が産み出す卵の数は一〇万から二〇〇万粒で、魚類の中でも多い方に属してゐる。スケソは産卵期になると、大体水深一〇〇米から二〇〇米くらいのところに非常に沢山集まり、産卵の際には雄と雌がかなりはつきりと分離行動を行い、一般に下戸に雌、上戸に雄と言う配置で放卵放精を行う。親は果団受精による分離浮遊卵を産み放すだけで、親としての保護はほとんどしない。これだけ子供を産むのだからいたしかたないとも言える。この魚は孵化直後から稚魚時代の自然死亡が非常に大きいので、その資源変動は漁獲よりも海洋の環境、特に餌料生物の条件に左右されると言われている。しかし、近年北転船の主漁場である西カムチャツカのスケソは一般に小型化の傾向にあり、かつ一網当りの漁獲量が少なくなつてゐるので、この方面の資源については今後監視を厳しくする必要があると考へてゐる。

スケソは白味で、味も淡白だから調理の仕方によつては非常に美味しい魚に変化する。

また、筋肉は蛋白質が主体で脂肪が少ないから老人や、美容食には最適である。また、この魚の肝臓は脂肪が多く、ビタミンAが多量に含有しているから成長期の子供には適した食料と言える。

面白いことにソ連ではスケソを本格的に漁獲していない。

世界一のトロール船隊をもち自国に最も近い海域に鱈産する資源を積極的に利用しないことに私はかつて一種の疑問を持つていた。しかし、この謎も遠からずして解くことが出来たのである。私は昭和四一年に約五〇日間日本政府から派遣されて第一回日ソサンマ資源共同調査のためソ連科学調査船ベラミダ号（六八五トン）に乗船したことがある。その時ソ連の研究者ともろもろの魚類資源と、魚業について懇談したが、その際スケソについて尋ねてみた。すると、ソ連ではスケソをトロール網で混獲しているが、船上に積まれた魚体の上を寄生虫がはいずり廻つているので、不潔な魚の代表とされ、食用にされることなくフィッシュミールとして利用しているとのことであつた。ただし、日本には売魚としてこの資源を利用している。つまり、ソ連はスケソの有効適切な喰べ方、即ち食品加工技術をもたないからなのである。

近年、日本近海における魚類資源の漸減からスケソは吾が国々民の貴重な動物蛋白食糧におどりとつた。安価で栄養があり、好みに応じてどのようなようにでも調味加工出来るのだから、これ以上の食品加工原料はまたとない。

それ故、今後この資源を維持培養しつつ漁業の永続に努め、一億国民の貴重な動物蛋白食糧として恒久的な利用を計らなければならぬ。スケソは二三年前キロ当り五、六円に暴落したことがある。これに対処するため業界では一〇月から一二月の所謂無抱卵スケソを三分割方式によつて漁獲制限し、魚価維持に成功することが出来た。この次は、北洋水域の四、五月における産卵時期と、場所に対して適切な保護を加え、効果的な再生産対策によつて資源の維持を計る必要があると痛感している。

従来、下級な魚とみなされていたスケソが、今や日本人の叡智によつて最も価値ある魚類資源に変位したことを想えば、全く感無量のものがある。

夜を徹して荷揚げする巨大な北転船を見上げながら、無限の期待をもつてスケソの将来をしみじみと想うのである。

## 四十四年にとれた

### 珍魚・迷魚の話

資源科 小池幹雄

今年の、釧路、十勝地方の沿岸部は、例年より黒潮分派の張り出しが強かつたためか、沿岸部では暖流系の魚が多く見られた様です。これらのうち五種類程、紹介してみましよう。

#### ① ホウライエソ

写真の様に、見るからに狂悪そうな面構えのこの魚は、九月十五日、厚内、大津沖、水深五〇〇mの地点で、エビ桁網、明神丸によつて獲られました。上顎に四本、下顎に五本の強力な歯をもち、体側には発光器をもつており、いかにも深海魚としての特色を備えています。普通は、熱帯から温帯にかけての深部に生息するといわれますが、北米太平洋、ベーリング海等からも、殆んど近似した魚が獲られており、道東沖からは、初めてと思われる、この標本は、それらの、同種か異種かを明確にする意味でも貴重なものといえます。